

「高所得の子持ち世帯が「高齢者を安楽死させろ」と
とんでもない発言！

この方達は日本人の教育を受けていないのか？
DNAに聞いてみよ！」

令和4年4月26日

● MMT 子さんからの質問

西田さん、毎日配信を楽しみに聞かせて頂いています。今、とても不安に思っていることがあるので久しぶりに質問させて頂きました。高所得の子持ち世帯の方々が「高齢者を安楽死させろ」などと酷い発言をしているのです。彼らは、

1. 高齢者が増えたから彼らが払う社会保障費が高額になったことが不満
2. 高所得故に子供の扶養控除がないことが不満
3. 所得制限で子供への諸々の給付金や授業料免除制度の恩恵を受けられないことが不満

という税制上の不満とともに、コロナ対策の膨大な費用はその殆どが高齢者の為であり自分達は恩恵を受けていないどころか高齢者のせいで自粛させられたと、何もかも高齢者のせいにして言論の刃を高齢者に向けています。コロナ対策費は国債であり税財源ではないと説明しても、国債は将来世代の借金ではないと説明しても、「金を刷りすぎて円が安くなった、金を刷っても介護する人間は刷れないじゃないか」と反論します。私は、少子化の原因はバブル後のデフレマインドと消費増税で人々が徐々に困窮していくなかで子供を産み育てる余裕を失っていったという状況も大いに原因としてあると思っています。しかし彼らは逆に「我々は老人の社会保障や年金の為に重税を払っているが老人が払っている税金は消費税だけだから消費増税すべきだ」とすら言います。また、「生い先短い高齢者に与える財源を削って将来のある子供や若者に与えよ」と、あくまで税財源論です。税財源論は優生思

想を生む恐ろしい思想だと思います。財務省も岸田総理も「消費税は社会保障財源」と明言しており、「高齢者の増加による社会保障費の増加」という報道もされているので、若者が高齢者を憎悪する反応を呼び起こすのは当然かとも思います。こんなことは当然わかっていることではないかと思いますが、何故政府はこんなプロパガンダを堂々と掲げるのでしょうか。同じ日本人であり、戦時下日本の為に戦った兵士やその家族である今の高齢者に「早く死ね」と言うような論調は聞くに堪えません。また、経済力は年齢で一律ではなく、貧困な高齢者もいれば裕福な若者もいます。彼らの言うように高齢者の税負担を一律に上げられれば、今後年金受給額が少なくなっていく中、今でも多い高齢の生活保護世帯が増えるだけです。尚、彼らは生活保護受給者のことも「自己責任」論で否定しています。若者が皆「自分さえよければよい」と思う、不寛容な社会になってしまいました。このような倫理的混乱の中、私は、すべての国民の老後を税でなく国費で負担するという対策こそがこの若者たちを重税から解放し、全国民の将来不安を払しょくし、实体经济を活性化し、結果として税も自然増し、少子化も解消し、日本が救われる対策だと思います。西田さん、いかがでしょうか。

●西田昌司の答え

世の中には、高額納税者がいる一方、障害を抱えられている方もおり、支え合って生きるのが人間の社会というものです。今は高額納税をしている人であっても、今のまま生きていけるとは限りません。不慮の事故に遭って障害を抱える立場になることだってありますし、そもそも人は生きていればいつかは必ず老いに直面します。

高齢になると様々な身体の不具合がでてきますし、そんな人々を元気に働ける世代が面倒を見るのは当たり前であります。高齢者もかつては若者であって老人を支える存在でしたし、生まれた子供は親から面倒を見てもらえなければ生きていけません。誰もが他人からの援助があつての今の自分なのです。そのように思えば高齢者に対して自らの所得を奪い去る邪魔者といった発想などでてくるはずがありません。

「情けは人のためならず」という言葉があります。この言葉を「親切にするのはその人のためにならない」と誤って解釈している人がいますが、そうではなく、「人に親切にすれば、その相手のためになるだけでなく、やがてはよい報いとなって自分にもどってくる」という意味です。日本人はまさしくこの言葉の通りに互いに助け合って生きてきましたし、その生き様がDNAに刻み込まれているはずで

かつては日本人のほとんどはお百姓さんであり、一家総出で田植えや草刈りや稲刈りをしていましたし、集落で助け合い、一年を通して皆が協力して生きていました。台風が来て水害に遭ったり稲が倒れたりすれば、皆で泣きながら苦楽をともにしていました。

日本人が一番大切にしている、皆で喜びと悲しみを分かち合うという世のありかたについて、安倍総理は「瑞穂の資本主義」と呼びましたし、岸田総理は同様のことを「新しい資本主義」と呼びますが、そういった日本人の心を大切にせねばと、今回の質問を頂いて改めて思いました。

反訳：ウッキーさん

Copyright：週刊西田 <http://www.shukannishida.jp>